

ベルクソン『試論』における折衷概念と形式について

清塚 明朗

1. はじめに

ベルクソンの議論運びの特徴は、ある哲学的な問題が不適切な観念によって立てられたものであって、適切な観念によって整理し直されることでその問題が自然と消え去ってしまう「疑似問題」であることを示すというものである。そのことは、彼自身が後年、『意識に直接与えられたものについての試論』（以下、『試論』）¹を例に挙げて述懐している通りである²。しばしば指摘されてきたように³、彼は、哲学的な問題の批判、論敵の批判を行ったあとで、どのようにして「疑似問題」が発生してきたのかの説明を試みる。

『試論』はまさしく、テキスト全体でこの「疑似問題」の発生を論じた書物であると言える。ベルクソンにとって自由の問題とは持続と延長を混同することによって生じた「疑似問題」なのであって⁴、自由の定義不可能性を結論とし⁵、自由の問題が「誤解 (malentendu)」から生じたと述べることで論を終える⁶。実際、その序文で「私たちが強度と持続の観念を研究する最初の2章は、第3章の導入として役立つように書かれた」(DI, VIII)と述べられているのは、第1章で扱われる、質と量の混同が生じている場所である強度も、第2章で扱われる、持続と延長の混同や継起と同時性の混同も、ともに『試論』の主題になっている自由の問題を発生させる源泉になっているからである。「これらの混同がいったん払拭されたなら、[...] ある意味では自由そのものの問題が消えるのを人はおそらく見るだろう」(DI, VII-VIII)というのがベルクソンの見立てなのである。

『試論』の本文を構成する三つの章は、混同が解消されなければならない三つの観念と対応している。ベルクソンは「結論」において次のようにまとめている。

[...] 自我をその根源的な純粹さにおいて観想するために、心理学は、外界の明らかな痕跡を孕んだいくつかの形式を除去ないし修正しなければならない。—これらの形式とは何であるか。[...] —強度、持続、意志的決定。これらの三つの観念こそが、[...] 純化されなければならなかった。(DI, 168 強調引用者)

ところで、例えば質と量の混同が生じている場所とされる強度概念のような、ベルクソンが「折衷概念 (concept bâtard)」と呼ぶもの⁷と、「純化された」持続とは、形式として、どのような同一性と差異を持っているのだろうか。あるいは、それらの形式とはいかなるものであるのか。『試論』が「疑似問題」の発生を論じる書物であることからして、これらの問いは重要だと思われる。そこで本稿では、まず『試論』におけるリズム概念と強度概念を媒介にして、折衷概念を正確に位置づけなおし、その上で、ベルクソンが考える形式性について論じたい。

2. メロディとリズム

絶えず生成途中にあり、自己組織化し続ける持続のイメージとして、メロディという比喩をベルクソンが用いることは、広く知られている。メロディにおいては、新しい一音が奏でられるたびに、その一音はそれまでの音の全体と相互に浸透し合う。メロディはそのつど新しく全体化され、そこには質的な変化が生じている。ジャンケレヴィッチが「このような限りのない全体化こそが、音楽において、それぞれの音のまわりでメロディの全体を再現する (reconstituer)」(Jankélévitch 1959, 18) と的確に表現するように、メロディは有機的組織化の特権的な例である⁸。

それに対して、一般に、ベルクソンの語る有機的組織化が解釈される際、リズムという比喩が援用されることはまずない。それはもちろん当然のことである。ベルクソンが有機的組織化を論じる際に、リズムという語をメロディのように多用するわけでもなければ、そもそもリズムとメロディでは指示する内容が同じではないからである。

とはいえ、リズムという語とともに有機的組織化が語られる場面も存在する。もちろん、わずかな用例があるからといって、メロディの特権性は揺らぐことはないし、その用例をもって、メロディに代えてリズムの特権性をここで主張したいわけではない⁹。しかしながら、少なくとも『試論』の議論構造を正確に理解するためには、メロディ的な有機的組織化とリズム的な有機的組織化を区別することは、決して無益ではないだろう。

リズム的な有機的組織化が言及されている箇所を確認しよう。ただし、先にメロディ的な有機的組織化に言及しなければならない。というのも、前者に話が及ぶのは、後者の話の後だからである。時間の計測可能性を否定するための議論と

して、「ちょうど一分経ったところだ」(DI, 78) と言うために、秒を刻む振り子が 60 回揺れるのを数える場面が考察される。ベルクソンの議論は三つのステップで進む。A. 60 回の揺れが一挙に、精神のただ一つの覚知において表象されるなら、仮定からして継起の観念が排除されていることになる。B. 60 回の揺れが継起的に表象されながらも、先行する揺れの記憶が排除されるなら、絶えず現在に留まらざるをえず、結果として継起や持続を考えられなくなる。C. 先行する揺れの記憶が保持され、現在の揺れの像に付加される場合、保持・付加することが並置することを意味するなら A と同じ帰結が生じるので、それとは別の保持・付加の仕方が必要になる。

私は一方の揺れの像のうちに他方の像を覚知する。それらの像はメロディの音のように相互に浸透し合い、有機的に組織化されることで、数とはなんら類似しない不判明で質的な多様性と私たちが呼ぶものを形成することになる。
(DI, 78)

ここで述べられているのは、統一・差異化の原理を別立てで必要としない、内在的な純粹持続のイメージである。それはメロディの比喩とともに語られているのであって、やはりメロディは特権的なのである。

ところが、リズム的な有機的組織化が言及されるのは、まさに同じ段落、上記の引用の後である。

振り子の規則的な振動が私たちに眠気を催させるとき、この効果を生み出すのは、聞かれた最後の音、知覚された最後の運動だろうか。そうではない。
[...] したがって、次のように認めなければならない。すなわち、音は相互に合成しあい、量である限りのそれらの量ではなく、それらの量が提示した質によって、すなわち、それらの総体のリズム的な有機的組織化 (organisation rythmique) によって作用したのだ。(DI, 78-9)

数とは無関係の質的多様性についてメロディが用いられているのとは違って、リズムは量との関係において用いられている。注意しなければならないのは、リズム的な有機的組織化が関係づけられているのが、量そのものだけでも質そのものだけでなく、「それらの量が提示した質」という折衷的なものだ、ということである。もちろん、ベルクソンの力点は、(リズム的な)有機的組織化に、そし

て（量の）質につくのであるが、「リズム的な」という形容がついた有機的組織化が、そして「量の」という限定がついた質が、純粹持続である質的多様性そのものであるとは言い難いだろう。要するに、まったく質的な進展を指示するメロディ的な有機的組織化に対して、リズム的な有機的組織化は、量と質の独特な関係を指示しているように思われる。もう一箇所、引用しておこう。

要するに、私たちが諸単位を数え、その一つの判明に区別された多様性を形成する過程は、二重の様相を呈す。一方では、私たちは諸単位を同一的なものと想定する。ただし、そのことが理解されうるのは、それら諸単位が等質的な場のうちに並べられるという条件のもとでのみである。しかし他方で、例えば、三番目の単位は、他の二つの単位に付け加わることで、総体の本性、相貌、リズムのようなものを変容させる。この相互浸透とこのいわば質的な進展なくしては、いかなる付加も可能ではないだろう。一だから、量の持つ質のおかげでこそ、私たちは質のない量の観念を形成する。（DI, 92）

「量の持つ質」は、ここでは明らかに肯定的に言及されている。質だけに力点が置かれる限りでは、肯定的であるのも頷ける。そうであるとしても、ベルクソンが空間概念から純化されるべきだと考えた折衷概念、すなわち、量と質のあいの子である強度概念¹⁰と、「量の持つ質」あるいは「リズム的な有機的組織化」との関係はどのようになっているのだろうか。このことを考察するために、3 節では、美的感情における強度に関する記述を見ることにする。

3. 強度と暗示美学

ベルクソンは『試論』第1章で、美の感情が程度をいかにして許容するのかを見るために、美の感情の分析を行う。彼は芸術の目的を次のように考えている。

この観点に身を置くと気付くのは、次のことである。私たちの考えるところでは、芸術の目的は、私たちの人格の活動的な力能、あるいはむしろ私たちの人格の反抗的な力能を眠らせ、かくして私たちを完全な従順の状態にもたらし、私たちが暗示される観念を実現し、表現された感情と共感するようにさせることである。（DI, 11）

芸術は、催眠状態における暗示と類似した暗示をかけるものとして、考えられている¹¹。ベルクソンはここで、いわば暗示美学とでも言うべき、美学観を語っている。そこで鍵となる、暗示をかけるための技法こそが、リズムなのである。

本節の役目は二つある。一つ目として、美の感情における程度の議論に関するベルクソン自身の記述を見ていくことで、「リズム的な有機的組織化」をリズムによって感情が暗示される事態に重ね、理解する。とはいえ、先の引用ですでに、必要な要素は出てしまっているので、前もって見通しを提示しておこう。すなわち、リズムの役割は鑑賞者の主体性を「眠らせ」ることにある。この催眠効果によって、鑑賞者の主体性や意志とは別のところで、感情が立ち現れてくる。二つ目として、美の感情における程度に関して、二つの尺度が語られることを確認する。それは、次節で述べることになる、自我の二相に関わる。

さて、上記の引用の直後で、音楽、詩、造形芸術の例が挙げられているが、それらの例のいずれのうちでも、リズムの効果、ないしリズムの効果と類似した効果が見出されている。ここでは、詩の例を引用しておこう。

詩の魅力はどこからくるのか。詩人とは、その人のもとで、感情がイメージへと自らを展開し、イメージそのものが言葉へ、それもリズムに従順な言葉へと自らを展開し、その結果として感情を翻訳する、そのような人のことである。私たちの目の前でイメージが再び浮かび上がるのを見るとき、私たちの方とはいうと、イメージのいわば情動的な等価物といえるような感情を経験するだろう。しかし、私たちの魂が揺すられ、眠らされて、夢の中にいるように我を忘れて、詩人とともに考え、見るようにさせるリズムの規則的な運動がなかったなら、このイメージがそれほど強く私たちに対して実現されることはなかっただろう。(DI, 11)

リズムは、詩によって詩人が伝えたいところの感情を鑑賞者に経験させるものである。リズムによって鑑賞者が暗示をかけられることで、鑑賞者は、詩人のもとに生じた感情をいわば追体験することになる。

ベルクソンは以上のような議論の帰結として、暗示された感情はすべて美的な性格を帯びるとする。したがって、美的な感情における強度は、暗示のかかり具合の程度であり、「状態ないし本性の差異」(DI, 13)である催眠状態のフェーズの違いとして、ベルクソンは考えている。

さらに、ベルクソンは芸術作品の美点を測るもう一つの尺度として、表現され

た感情そのものの豊かさを挙げる。そして、美的な感情の程度として、今度は「深さないし高揚の程度」(DI, 13 強調引用者)が検討される。すなわち、「芸術家が私たちに暗示する感情や思考は、彼の来歴の一部を多かれ少なかれ表現し、要約している」(DI, 13)、というものである。多くの感覚、感情、観念をうちに含んだ情動を、その本来の複雑さにおいて把握するためには、鑑賞者自身も追体験するしかない。だから、芸術家は模倣させるのである。

芸術家が目指すところは、このあまりに豊かで、あまりに人格的で、あまりに新しい情動の中に、私たちに導き入れることであり、彼が私たちに理解させることができないものを私たちに体験させることである。そうであるから、彼は、自分の感情の外的顕現 (*manifestations extérieures*) の中から、私たちの身体がそれに気づいたら、たとえわずかであっても機械的に模倣してしまう外的顕現を定めて、そうすることで、外的顕現を引き起こす定義できない心理学的状態の中に、私たちを一挙に戻す。(DI, 13)

芸術家は模倣させることで、豊かで新しい情動を鑑賞者に追体験させる。追体験によって一挙に伝えられるこの豊かで新しい情動は、この芸術家の他の感覚、感情、観念をそのうちに含んでいるのであるから、それらを含んでいる分だけ深い情動である。したがって、「深さの程度は、私たちが根本的な情動のうちに錯雑とした形で見抜く要素的な心的状態の大小様々な数に対応している」(DI, 14)と、ベルクソンは考える。

実は、以上のように本節で見てきた、この美の感情を論じた『試論』第1章の議論で用いられている表現は、『試論』の中心的なテーマを論じるその第3章における自由の議論で用いられている表現とほぼ同じである。そうであるから、美の感情の程度を示す二種類、すなわち「強度」と「深さ」における規定は、ベルクソンが自由行為を論じる場面での、自我の二相の規定に重ねられることができるように思われる¹²。節を改めて、この点を検討しよう。

4. 自我の二相

私たちがこれらの二分法の対応関係にこだわっているのは、二分法の二項を分ける分割線、そして二分法どうしを貫く筋が、まさに『試論』の本題である自由に関わってくるからである。本節では、自我の二相の議論から、それとこれまで

の二分法との対応関係を確認した上で、この二分法が二元的ではないことを明らかにしたい。

ベルクソンは、自由を定義できないと述べたが、自由行為に規定を与えている。

この内的な状態の外的顕現がまさしく自由行為と呼ばれるものであろう。というのも、自我のみがその作者であったからであり、その顕現が自我全体を表現しているからであろう。(DI, 124-5)

ある行為が自由行為である根拠として、自我が行為の作者であること、行為が自我全体を表現していることが挙げられている。多くの議論を要するため、今これらの点をすべて詳らかにすることはできないが、ここでは、そのどちらもが自我の深さと関わっている点だけを押さえておきたい。この自由行為の規定の前で、次のように述べられている。

これらの感情〔魂を決定する共感、敵意や憎しみ〕は、それらが十分な深みに達してさえすれば、魂の内容の全体が感情のそれぞれに反映されているという意味で、それぞれが魂全体を代理表象 (représenter) している。魂がこれらの感情のいずれか一つの影響のもとで決定されるということは、したがって、魂が自分自身を決定すると認めることである。(DI, 124 強調引用者)

魂全体が表現されている外的顕現は、深層の自我においてなされるのである。

自由行為の規定の後では、自由に絶対的な性格を帰すスピリチュアリズムがなすある種の解釈に対して、「自由は程度を許容する」(DI, 125)¹³ということを注記する文脈で、次のように言われる。

自我は、それが等質的な空間を知覚する限りで、ある何らかの表面を提示するのであって、その表面の上では、独立した肥大部が形成され、漂うことができるだろう。だから、催眠状態で受け取った暗示は、意識の諸状態の塊と一体化することはない。そうではなく暗示は、固有の生命を授けられて、その時が来れば人格そのものにとって代わるだろう。何らかの偶発的な状況によって生じる激しい怒りや、有機体の暗い深みから意識の表面へと突然浮き出してくる遺伝的な欠陥は、ほとんど催眠術の暗示のように働くだろう。(DI, 125 強調引用者)

深層の自我が自己決定するものであるのに対して、表層の自我は決定する主体ではなく暗示を受け、人格がその暗示にとって代わられてしまうものである。

上記一群の引用がある段落の後で、「そのように理解されれば、自由行為は稀である」(DI, 126)、とベルクソンは述べる。というのも、暗示が人格にとって代わるので、日常生活においては、私たちはほとんどの場合、「意識ある自動機械」(DI, 126)だからである。外部から入ってくるある印象と、その印象を受けてしかじかの行為をするという観念とが結びつくために、印象が入ってくれば、人格を介さずとも、それに引き続いて自動的に行為がなされる¹⁴。観念として表象されているから、結果なされる行為は、「意識的であり、知性的でさえあるのだが、多くの面で反射的な行為に類似している」(DI, 127)。時代を異にする私たちの目には奇妙にも映る説明であるが、いずれにせよ、ベルクソンが暗示を特殊な事例として見ていないどころか、私たちの日常の意識のあり方すら、暗示と類比的に理解していたのである。

このように、ベルクソンは行動を決定する二つの自我を区別するのだが、しかしこれらの自我は、それぞれ持続と空間を特徴づける相互浸透と相互外在によって、きっぱりと区別されるわけではないことにも注意しておきたい。

これらの独立した諸項〔暗示、激しい怒り、遺伝的な欠陥〕の傍には、より複合的な諸系列が見られるだろう。それらの系列の諸要素は確かに相互に浸透しているが、決して自我の稠密な塊に自分自身を完全に溶け込ませるには至らない。〔…〕ここ、まさに根底的な自我の只中で、その自我を連続的に侵食していく寄生的な自我が形成される。(DI, 125 強調引用者)

以上の確認から、美の感情の「強度」／「深さ」と、自我の「表面」／「深み」とを重ねて解釈することに、さらにはそこに、有機的組織化の「リズム」／「メロディ」を重ねて解釈することに、もはや異存はないだろう。

さて、私たちはこれまで、ベルクソン自身が述べている三つの二分法を重ね合わせてきたが、それらの二分法が重ね合わさることから、興味深い帰結が引き出されてくる。二分法の重ね合わせによって、これらの二分法に従ってそれぞれの対象を二つに分けることが強調されてきたかのように見えたかもしれない。ところが実は、対象を二つのものに完全に分離させてしまうことはむしろ本意ではない。まさにベルクソン自身が自我の二相を本当は一つの自我だと述べたよう

に、二分法の重ね合わせから引き出されてくるのは、二分法で分けられる二項が決定的に二元的ではない、ということである。すなわち、どちらも美の感情であり、どちらも自我であり、どちらも有機的組織化なのである。もちろん、本当に肯定的に語られるのはかならずその一方でしかないのだが。この点について、ベルクソンが自我に関して述べている箇所を引用しよう。

こうして、第一の自我を覆うある第二の自我が形成される。その自我の現存には判明に区別された諸瞬間があり、その自我の諸状態は相互に切り離れていて、語によって難なく表現される。だからといってここで私たちのことを、人格を二重化し、私たちがまずもって人格から排除した数的な多様性を、別の形で人格に導入したとしないであらう。判明に区別された諸状態を覚知する自我も、ついでいっそうの注意を集中するなら、その諸状態を、長く手に触れていた雪の針状結晶のように相互に溶け合うのを見ることになる自我も、同じ自我なのである。(DI, 103)

人格と暗示に関してこれまで確認してきたことを思い起こせば、人格が二重化されていないことは明らかであろう。自我そのものは同じなのである。ただし、「意識的な生は、直接に覚知されるか、空間を通る屈折によって覚知されるかに従って、二重の様相で現れる」(DI, 102)。

そうであるから、美の感情の「強度」／「深さ」も、自我の「表面」／「深み」も、有機的組織化の「リズム」／「メロディ」も、後者により根底的な位置が与えられるのであるが、それでも、対置される二つのものが根源的に、そしてきっぱりと分かれていたわけではないのである。

5. 折衷概念の形式性

ただ一つの自我が二重の様相を帯びて現れるのは、それを捉える二つの形式があるからである。実際、前節で見た自我の二相の議論は、次の引用から始まる。

私たちが多様性の二つの形式、ないし持続の二つの形式を区別するに至ったら、次のことは明白だ。意識の諸状態はそれぞれ別々に取り上げられると、それが判明な多様性の只中で考えられるか、それとも錯雑とした多様性の只中で考えられるかに応じて […] 異なった様相をとるはずである。(DI, 96)

注意しなければならないのは、ここでもベルクソンが二つの形式と述べることで、まったく接点のない二種類のものを考えているわけではないということである。言い換えれば、二つの多様性、すなわち質的多様性と数的多様性は根本的な二元論になっているわけではない¹⁵。質的多様性は、それ自身だけで有機的組織化がなされるまったき質的進展であるのに対して、形成の途上にある数的多様性は、質的多様性による有機的組織化と、相互外在的な諸項が配列される等質的な場とを必要とする¹⁶限りで、折衷的なもの（リズム的な有機的組織化）にすぎない。

二つの多様性が根本的に二元的ではないからとて、それらを二つの形式としての区別することが無意味になるわけではない。それらを二つの形式として区別せしめているのは、形式性に関する二つの理解なのである。

ベルクソンは、「カントとともに、この空間 [= 等質空間] を、それを満たす実質 (matière) から区別した。彼とともに、等質空間が感性の一形式であることを認めた」(DI, 177) と述べる。確かに、ベルクソンは空間に関して形式と実質を区別していたが、彼が多様性を形式と述べる時、どちらの多様性に対しても、この形式と実質の区別を保持しているわけではない。実質とは区別される形式という限りの形式性が適用されるのは、数的多様性だけである。それに対して、質的多様性においては、形式と実質は区別されないのである。

質的多様性はそれ自身を実質とする形式だと考えなければならない。なぜなら、「それら自身において考察された、深い意識の諸状態は [...] 純粋な質」(DI, 102) だとされるので、質的多様性は、この「純粋な質」を捉える形式なのであるが、質を他ならぬ質によって多様として捉える形式であるがゆえに、「質的な差異化の原理」(DI, 71) と呼ばれるべきだからである。ベルクソンは、精神を自らの領域とする認識に対して、形式と実質の分離を認めない。それに対して、数的多様性は、この「純粋な質」を質とは別のもの、すなわち等質的な場によって捉える形式なのである。

このように、ベルクソンは、折衷概念において形式と実質を分離させるのだが、にもかかわらず同時に、形式が実質によって変容を被ってしまう事態をも記述する。最後に次節で、形式性についての彼の特異な理解を考察することにした。

6. 空間化と形式性の変容

本稿冒頭で紹介した、疑似問題が発生する過程を説明するというベルクソンの

議論の特徴は、『試論』全体のテーマである自由の問題そのものに限られたことではない。自由の問題へとつながっていくより下位のテーマに関してもそのようなのである。心理的な事象における内的な因果性に関して必然的決定という観念とは違う観念の一例として挙げられる力の観念が、どのようにして必然的な相貌をとるに至るのか、このことについても彼は同様の仕方で述べる。

力の観念は実際には必然的な決定の観念とは相容れないのだが、因果律が自然の中で用いられるまさにその結果として、いわば必然性の観念と混ざり合う (s'amalgamer) 習慣を身に付けてしまったのである。一方で私たちは意識の証言によってのみ力を認識するのであり、意識は来たるべき行為の絶対的な決定を肯定しないし、理解することさえしない。[...] しかし他方で、この力の観念が自然の中に移し入れられると、必然性の観念と隣り合って歩いたことによって、ゆがめられてこの旅路から帰ってくる。力の観念は必然性の観念に浸されてこの旅路から帰ってくることになるのだ。(DI, 162-3)

ベルクソンの考えでは、まだ行為へと現実化されていないある観念と実際に現実化された行為との間にある努力の感情という形で未規定なものとして示される力の観念は、ある行為を指向する観念から実際の行為への移行が絶対的な決定のもとにあるわけではないことを証立している。にもかかわらず、この力の観念が心理的な事象だけでなく物質的な事象にも適用されると、その結果として力の観念がゆがめられ、もはや心理的な事象を適切に捉えることができないものへ変わってしまう。このような記述もまた、意識の錯覚がどのように発生したのかを説明するものである。そしてベルクソンは、「[...] 自由な努力の動的な観念と必然的な決定の数学的な概念との間で、内浸透現象に比することさえできるある交換がなされるとしても、驚くことはないだろう」(DI, 164) と言い切るのである。

内浸透現象に比される交換は『試論』第2章ですでに継起と外在性の間でなされる交換として登場していて¹⁷、そこでもまた、いわば空間化された時間、すなわち同一的な諸瞬間が相互に浸透することなく引き続いていく等質的な内的持続という誤った観念の発生を説明するために使われている。形式が空間化されることによって決定的に変質し、心理的な事象を捉えられなくなってしまうという点では二つの交換は同じである。その意味で、上記の引用箇所記述されている事態は力の観念の空間化と呼ぶことができるだろう。

しかしこの力の観念の空間化は、空間化という言葉のイメージに反して、力の

観念という形式が必然性という観念によって一方的に侵食され、必然的な相貌を帯びさせられてしまうわけではない。力の観念と必然性の観念との混合体には、力の観念が必然性に侵食されたものと、必然性をもった物質的世界が力の観念によって捉えられたものが考えられる¹⁸。力の観念の空間化には、必然性をもった物質的世界を力の観念を通して捉えようとするのが先立つ。言い換えると、力の観念を形式として使用することなしには、必然性を対象から貰い受けることもなかった。力の観念を形式として、必然性をもった対象に適用した結果として、力の観念の空間化が生じる。要するに、上記引用箇所でもベルクソンが記述する力の観念の空間化において特徴的なことは、力の観念が物質的な事象を捉えるための形式として物質的世界に適用されると、事象を捉える枠組みを与える側のこの形式が翻って枠組みを与えられる側の物質的世界から決定的な変容を被ることなのである。

以上のように、空間化という事態は疑似問題の発生過程を説明する中で記述されている。「結論」部では、強度、持続、意志的決定という三つの形式に空間の観念が入り込んでいるかを疑う理由が述べられている。そこでも、形式がそれを適用する対象から変容を被ることが指摘される。

[...] 私たちが物質を当てはめる諸形式が全面的に精神に由来していると想定するとしても、これらの諸形式を恒常的に諸対象に適用するとき、これらの諸対象の色がただちに諸形式に移らざる (*détendre*) をえないように思われる。[...] 私たちがこの物質に多くを与えるとすると、私たちはこの物質から何がしかを疑いもなく受け取る [...]。(DI, 168)

このようにして形式がそれを適用する対象から変容を被ることの帰結は、変容以前の形式が捉えることができていたものを捉えられなくなるということである。例えば、「自我が置かれる枠組みの反映を自我の色合いそのものだとみなす」(DI, 168) ようになってしまうと述べられる。形式の変容以前の認識と形式の変容以後の認識は決定的に変わってしまっている。もちろんこのことを、よく知られた言葉で言えば空間化であるとか疑似問題の源泉であるとかと呼ぶこともできる。しかしベルクソンにより特徴的なことは、認識の決定的な変容が形式の変容によってなされるということである。ここには形式性に関するベルクソンに特異な理解を見出すことができよう。

7. おわりに

ベルクソンが述べるどころの折衷概念を本稿が追いかけてきたのは、彼が形式性についてどのような考えを持っていたのかを明らかにするためであった。

美の感情の「強度」、「リズム的な有機的組織化」、必然的な「力の観念」の三つはそれぞれ、「深さ」、メロディ的な「有機的組織化」、意識が捉えるがままの「力の観念」に対置されるが、前三者は後三者から独立に存立するわけではない。むしろベルクソンが説明していたのは、疑似問題の源泉としての、前三者のような折衷概念が発生してくる過程である。

折衷概念が発生してくる過程は、形式と実質の乖離に存する。しかしながら、その形式が、純粋な形式としての等質空間ではなく、折衷概念と呼ばれる以上は、形式はそれでもまだ実質との関係を放棄していない。持続において形式と実質が相互浸透していたように、折衷概念においても形式と実質が、「内浸透」ないし「妥協」を引き起こす。すなわち、形式は実質によって変容を被る。この可塑的な形式性にこそベルクソンの形式観の特異性があるのだが、それを、形式性についての単なる無理解ではなく、特異たらしめているのは、持続との類似性であるように思われる。本稿が考察してきた、『試論』を貫く二分法は、根本的に二元的ではなく、一つのもの二相である。そのことがまさしく、折衷概念が折衷である所以なのであって、折衷概念の発生の議論には、形式と実質とが判明に区別されない持続における可塑的な形式性に類似した形式性が見出されるのである。

¹ ベルクソンの著作からの引用は慣例に従い、参考文献に記した略号と頁数を括弧で括って示す。

² PM, 20-2 を参照。

³ 例えば、Bouaniche (2011, 27)。

⁴ PM, 20 を参照。「主な変質は疑いもなく自由の問題を生み出したそれである—それは持続と延長とを混同することから生まれる疑似問題である」。

⁵ DI, 165 を参照。「人は具体的な自我とそれがなす行為との関係を自由と呼ぶ。この関係は定義できない。というのもまさしく私たちが自由であるのだから」。

⁶ DI, 180 を参照。「したがって自由の問題は誤解から生まれる […]」。

⁷ ベルクソンが「折衷概念」という語を実際に用いて名指したのは「強度」だけである (cf. DI, 169)。しかし、「したがって、等質的な場の形式のもとで思い描かれた時間は、空間の観念が純粋な意識の領域に闖入したことに起因する折衷概念ではないかと問う余地があることになろう」(DI, 73) という記述を根拠に、本稿では、空間との混同、さらには『試論』の中でベルクソンが批判する混同をすべて折衷概念と解する。ただし、もはや空間そのものとみなされているものについては、その限りではない。

⁸ DI, 75 を参照。「したがって、区別なき継起を、それも諸要素の相互浸透、連帯、内密な有機的組織化として思い描くことができるのだが、これらの諸要素はそれぞれ全体を表象しているので、それらが互いに区別され、引き離されるのは、抽象を行う思考にとってでしかない」。

⁹ ベルクソン哲学において、リズム概念が重要な役割を果たす議論もある。一つには『物質と

記憶』における「持続のリズム」の議論があるが、宇宙論へとつながっていくこのリズム概念は、『試論』で考えられているリズム概念とは明らかに異なっているので、本稿では取り扱わない。もう一つは、『試論』において芸術・暗示とともに語られるリズムである。本稿が取り扱うのは、このリズムに属している。杉山は、『試論』において主要なテーマであった自我の「内在的統一」に対して、『道徳と宗教の二源泉』において重要なテーマとなる「呼びかけ」の「異他的な触発」の契機を、『試論』におけるリズム概念に見ている (cf. 杉山 (2006, 243-80))。

¹⁰ DI, 169 を参照。「したがって、単純な状態の強度は量ではなく、量の質的な記号である。あなたがたはその起源を、意識の事実である純粋な質と、必然的に空間である純然たる量との妥協のうちに見る」。

¹¹ 暗示あるいは催眠と美学とを結びつける考えは、19世紀後半のフランスにおいて必ずしも特異なものではない (cf. Kalinowski (2004)、および杉山 (2013))。

¹² 杉山は、美的感情の二種類の程度と、根本的な自我／表面的な自我の対比とを単純に重ね合わせることはできないことを指摘しているが、本稿ではむしろそれらを重ねることで見えてくることを取り出したい (cf. 杉山 (2006))。

¹³ 自由の程度をどのように解釈すべきかという点については、いまだ十分に論じ尽くされていない難しい問題である。本稿では、第1章で論じられた二種類の程度、すなわち「強度」と「深さ」、そしてとりわけ「深さ」が自由の程度であると解釈する。

¹⁴ ベルクソンのこの説明には、観念が自動的に行動へと移っていくという、「観念—運動 (idéo-moteur)」の奇妙な発想が見られる。この点については、杉山 (2013) を参照。

¹⁵ 『試論』の議論において、真に二元的であるのは、持続と空間だと考えるべきであろう。

¹⁶ DI, 169-70 を参照。「私たちが見てきたことは、数の構成は、まず、相互に判明に区別された項を配列しうる等質的な場の直観、つまり空間の直観を要請し、次いで、この単位が相互に力動的に付け加わり、質的多様性と私たちが呼ぶものを形成する浸透と有機的組織化の過程を要請するということだった」。

¹⁷ DI, 81 を参照。「ところで、外在性のないこの継起と継起のないこの外在性との間で、内浸透現象と物理学者が呼ぶものかなり類似した一種の交換が生じる」。

¹⁸ ヴォルムスは持続と空間が混在している実在の現象的な表象のうちに、「持続の空間化」と「空間の時間化」を見分けている。しかしこれらは、ヴォルムスが言うように「二種類」のものではなく、持続という形式によって空間性を帯びた対象を捉えようとする（空間の時間化）の帰結として、持続という形式が空間性を帯びさせられてしまう（持続の空間化）という一つの事態の二つの契機と言うべきである (cf. Worms (1994))。

[参考文献]

Bergson, Henri. 1889. *Essai sur les données immédiates de la conscience*, P.U.F., coll. « Quadrige », 2007. (DI)

———. 1932. *La pensée et le mouvant*, P.U.F., coll. « Quadrige », 2009. (PM)

Bouaniche, Arnaud. 2011. “Lire l’*Essai* à lumière de l’acte libre,” in *Lire Bergson*, F. Worms et C. Riquier, P.U.F, 21-33.

Jankélévitch, Vladimir. 1959. *Henri Bergson*, P.U.F., coll. « Quadrige ».

Kalinowski, Isabelle. 2004. “La littérature comme pathologie,” in *Le moment 1900 en philosophie*, F. Worms, Presses Universitaires du Septentrion, 331-9.

Worms, Frédéric. 1994. “Les trois dimensions de la question de l’espace dans l’œuvre de Bergson,” *Epokhè*, 4, Millon, 89-116.

杉山直樹. 2006. 『ベルクソン 聴診する経験論』, 創文社.

———. 2013. 「意識の他者／他者の意識—フランスにおける心理学と無意識(一八八〇—八九年) —」, 『思想』, 2013年4月号, No. 1068, 181-206.